

杉の間

玄関左手の応接間、2階の広間は書院造で、長押[なげし]が鴨居[かもい]の上に打たれています。正式の接待を行う部屋の意匠は書院風にするのが習わしでした。一方、杉の間は、東側の角の間は書院風ですが、奥の二間はくだけた意匠をもつ数寄屋[すきや]風の座敷としています。特に南の部屋は、あらゆる杉材の木目を「板目」で見せる一風変わったものです。徹底的に「板目」を使って、木目を強調した座敷は類例がないといわれています。



杉の間から庭園を望む

朝倉家の歴史

朝倉家の先祖は、江戸時代の享保・元文年間(1700年代)に、武蔵国渋谷の地に定住して帰農し、大地主になりました。その後、他家から養子となった金蔵が当主だった幕末頃から、精米業を営むようになりました。

大正から昭和にかけて、東京府議会議長や渋谷区議会議長などを歴任した、当主の虎治郎(金蔵の孫タキの夫)が大正8年、朝倉家の本宅として、現在地に旧朝倉家住宅を建設しました。



中庭